

慈眼寺たより

第 13 号

平成 24 年 12 月
春日井市下市場町
「慈眼寺」

電話 81 - 6801
編集 伊藤秀文

篠木四ツ谷の独立

加藤健作

篠木四ツ谷町内会は、昭和四十六年に下市場町内会において、新たに規約を作成し、「篠木町内会」としてスタートしました。

それ以前については、中野久一氏発刊の「出会い」によりますと、

下市場町 一三〇戸

四ツ谷 一五五戸

七丁目南部 四五戸

金ケ口町 二〇戸

十三塚町 五戸

合計 三五五戸

なお、昭和四十五年度の役員は、

区長 下市場（前副区長）

副区長 下市場（兼会計）

四ツ谷（元区長）

区会議員 下市場 8 人

四ツ谷 4 人

金ケ口 1 人

南部 1 人

などと記されています。

この記載から、下市場区において、四谷からも区長という要職に付かれた方がお見えだったという

ことが分かりますし、四ツ谷と下市場との深い関わり方、すなわち一体化されていたことを理解することもできます。

そんな中にありながら、四ツ谷は新たに「篠木町内会」という組織を形成したのであります。これが四ツ谷の巣立ちの第一歩となりました。

なお、平成十一年四月には町内会名を「篠木四ツ谷」と改め、篠木小学校における昔からの通学団の名称も町内会名が表現されることになりました。

思い起こしてみますと、私は昭和五十五年篠木七丁目に転居してきましたが、その年度までは、下市場も大泉寺も同じ篠木小学校区の中に存していた仲間であったわけですが、それが、春日井市の発展とともに学校区が大きく変動し、活動拠点が下市場と四ツ谷では異なっていました。

平成二年度、ちょうど町内会が二十周年目に当たる年度に、私は篠木町内会の会計を担当しました。

その頃から既に、四ツ谷が下市場区に存する理由が不明であると取りざたされていた事を記憶しております。それは、北城小学校が設立され、東部中学校から南城中学校が分離された時点で、兄弟あるいは同家族としての活動が完全に分離してしまったからです。

活動を分離しますと、下市場区の会議に四ツ谷の役員が出向いても、審議に参加できる議題が非常に限られてきてしまします。そういう状況の中で四十年間、下市場区とともに歩んできましたのは、下市場区があつてこそ今の四ツ谷であることを、歴代の町内会長さん方はよく承知されていたのでしよう。

私は、奇しくも新たな町内会が発足して四十一年目に町内会長をお受けすることになりました。この節目が、分離の節目としてちょうど良いのではないかと、篠木四ツ谷町内会」の巣立ちの第二歩目にしたいと念じ、歴代町内会長様や町内会の主要な諸団体のまとめ役の方々にお集まり願ひ、相談させていただきました。その結果、全員の方々の同意をいただきましたので、当時の下市場区長にお願いして、下市場区議会に諮っていたことができました。

幸いにも区長のおとりなしによって、円満な独立が受け入れられ、一同大変に感謝しております。お世話になりました。
(二十三年度篠木四ツ谷町内会長)

《青柳歌壇・俳壇》

慈眼寺の紫水蓮咲くも秋
日曜をポツケに嬉しい雪礫

伊藤清雄

勤行の声も新たに初詣

秀

落葉踏み櫛通りをウオーキング
寒風に羽膨らます群雀

伊藤貴美子

葬の果て落ち葉焚きある兄おとうと
あるじ亡き庭に枯菊焚く煙

(同級生逝く) 矢野孝子

ありがたく傘寿を迎えた感謝

虚心坦懐米寿目指さん

ありがとう何とか元気でやっています

妻の墓前に新菊手向け

今井正

迫り来る悲しみ押さえ食いしばるに

嗚咽はもるる胸の奥より

先のことあれもこれとも思いつつ

初冬の冷気を感じておりぬ

た

町内のお祭り

伊藤健

お祭りについて考えてみましょう。区画整理のずっと前、子供たちは、といつても男の子だけではなく、「おまん」という夏祭りがありました。津島祭りの「お万灯」からきたものでしょう。下市場の町内を、東、中、西の三つの島に分け、それぞれの島で宿を決めて夏休み前から、集まっては準備をします。

子供たちの仕事は、学校から帰って宿に集まり、むいからすぐり（麦殻選り）をします。子供たちが宿の納屋に集まって、ワイワイ言いながら、麦わらの皮をむくのです。ヘタクそにむくと上級生から叱られます。すぐられたむいからが沢山貯まると、大人たちにお神輿にしてみもらいます。

「おまん」とは旧暦六月十六日のお天王祭りの日に行われました。その前日を前役といつて、子供たちのかつぐだし馬を作ってもらいます。夕食後宿に集まった大人たちによって、何十把のむいからを束ねて、ドラム缶ほどの太さの「馬」を作ります。その馬に孟宗竹の担ぎ棒を通し、上級生が二人で担ぎます。その馬には、鏡板が差し込まれます。鏡板には「ざし」という一

メートルくらいの割竹に三箇所にハタキの先のような紙飾りを取り付けたものを、二十本ほど差し込んであり、ちょうど大きな扇のようになりな形になります。だしが完成すると、宿からお宮まで真つ暗闇の中をご挨拶に行きます。

祭りの当日を「本役」といいます。その午前中、三つの島のだしがお宮に集まります。そのあと、だしを先頭に子供たちが行列を作つて巡行していきます。上級生が二人でだしを担ぎ、中くらいの子供が十人くらいで「かい」という竹笛を鳴らします。これは横笛の大きいようなもので、吹くとブーと鳴ります。法螺貝の音に似ているので「かい」といったのでしょうか。あとの子供は、「おいさつ」と声を掛け合います。「おいさつブー」「おいさつブー」。行列は各島の天王社、四ツ谷のお宮、秋葉さま、沢渡池の山の神、水神さまなどを回つて宿に戻ります。沢渡池では浄めの水浴びをした記憶があります。人が泳ぐと、泥が巻き上がるような水でした。

午後は、それぞれの島の各家を回つておひねりをいただきます。これは後で子供たちに分配されるので、とても力が入りました。そのほか、村中にある宿の親戚みないなところにも行きました。

巡行がすべて終わると、「馬」をお宮へ持つていき壊します。担ぎ棒だけを持つて宿に帰ります。宿では風呂に入れてもらい、夕食をご馳走になります。ひやむぎかお寿司かといったところでしたが、子供たちが集まって食事をするのが新鮮でした。そのあと花火をして解散します。一年生では五円くらいの金額でしたが、とても嬉しかったです。どこかの島では、六年生は二百円といわれて、羨ましかったです。

なお、だしを飾つた「ざし」は各戸に配られて、翌年まで床の間に飾つてありました。

以上は、おまんとの思い出ですが、これは男の子だけのお祭りで女の子の記憶は全くありません。どこで何をしていたのでしょうか。



子供会が受け継いだだし。はっぴは子供会のもの。当時は下着のシャツとパンツだけ。（下市場誌より転載）

平成二十五年年度年忌表
来年の年忌は次のとおりです。お早めにお申し込みください。

年忌	逝去年
一周忌	平成二十四年
三回忌	平成二十三年
七回忌	平成十九年
十三回忌	平成十三年
十七回忌	平成九年
二十三回忌	平成三年
二十七回忌	昭和六十二年
三十三回忌	昭和五十六年
三十七回忌	昭和五十二年
四十三回忌	昭和四十六年
四十七回忌	昭和四十二年
五〇回忌	昭和三十九年
各個別の年忌はホームページでも見られます。ご利用ください。	

行事予定

- 二月十一日 大般若会
正午から御詠歌奉詠
午後一時から法要、続いて
法話の会があります。
- 二月十五日 涅槃会
十時から法要
- 四月八日 灌仏会
十時から法要
甘茶を戴いてください。
- 八月十八日 お施餓鬼
受付は七月一日からです。
棚経は八月十日くらいからです。
原則は今年と同じです。お盆前に
各戸別のご案内をお送りします。

梶田繁政について

住職 春日井浩道

慈眼寺の歴史を見るうえで、避けて通れないのが梶田繁政である。そもそも梶田氏は、その昔加治田と称し、現在の岐阜県賀茂郡富加町のあたりに住んでいた。当時の新興勢力であった織田信長に加担すべく、蜂須賀小六などとともに美濃から尾張に移ってきたものと考えられる。このころは、こういう一旗組みがいたるところにウヨウヨしていたのである。これは、繁政の先代直繁の時である。その息子である繁政は、秀吉に仕え、後に福島正則の家老になつてゐるが、福島が広島から信州松代に改易されたのを機に、尾張へ帰り、当地で隠居したとされている。この繁政の代に、加治田を梶田と改めたようである。繁政はNHKの大河ドラマ「秀吉」にも登場しており、俳優の名前も出てい

たが、蜂須賀小六ほど有名でなかつたせい、私にはどれが繁政であるかわからなかつた。また、司馬遼太郎の小説「太閤記」の稲葉山城攻めの段にも出てくる。このときは藤吉郎と一緒に稲葉山の裏から登る役回りであつた。わりに矮小化された人物像で描かれている。蜂須賀が阿波の殿様になつたのに、同僚であつた梶田が福島の家老にしかねなかつたのは、やはりこの程度の人物だつたのだろうか。さて、この梶田繁政の位牌と、墓は慈眼寺にある。墓は境内ではなく少し離れたところにあつて五輪様と呼ばれてゐる。今は住宅地の真ん中にあるが、以前は水田の中に島のように塚があつてそこに五輪塔が立つてゐた。その碑文にはおよそ上に述べたような事が書いてある。それには、梶田氏は清和源氏の流れをくむ、武田信賢の子孫となつてい

るが、この当時はこういふでつち上げがはやつたそうである。かの徳川家でさえ、新田義貞の末裔と称するためにでつち上げをやつたといふ。

この五輪塔が建てられたのは、繁政の死後約、二〇〇年経つた文化十年（一八一三年）とかいてある。といふことは、この墓を立てたのは、数代後の子孫といふ事になるが、これをどう考えるかは、謎である。因みに梶田氏の子孫は現存してゐて、名古屋市の北区に住んでおられる。その縁が判明したのは、昭和四十年頃で、郷土史家の先生が、教師時代に受け持つた女生徒が梶田家に嫁いだことがきっかけになつたのである。このときの梶田家の当主は、奇しくも「繁政」といふお名前であつた。位牌は、繁政と、その父直繁のもの2本があつて、うらにはやはり碑文と同

様のことが書いてある。

この梶田氏と慈眼寺の関係であるが、はつきりいってよくわからない。ただ二人の亡くなつたのが江戸時代のはじめの頃であるから、現在の正統である福蔵寺末としての慈眼寺から見れば、あまりその記録は残したくなかつたのかもしれない。その葬式を慈眼寺でやつたとか、祠堂金を寄付したと記録があることから、当時の寺が何らかの支援を受けていた事は考えられる。当地の口伝もそんなニュアンスである。

（慈眼寺ホームページより）

檀方総代	
伊藤辰男	伊藤久幸
伊藤秀文	伊藤正廣
大野和義	大野悟
木村廣孝	春日井浩道
住職	春日井浩道



先住忌 10月6日

梅花だより
慈眼寺梅花講は現在二十人ほど。毎月三回ほど練習をしています。いろいろな団体と同じように、高齢化が進み、人数も減ってきてました。最近では、先代住職の十三回忌と、名古屋市民会館での管内大会に参加しました。

お仏膳の受付をしています
平成二十五年のお仏膳を受付中です。今までどおり、一年分一膳あたり千五百円です。お供えのお菓子は、お下がりとしてお持ち帰りください。



管内大会 10月10日

新しい方のご参加を歓迎します。見学だけでも結構です。是非ともお待ちしております。

編集後記

江戸城、松の廊下で赤穂城主浅野内匠頭が吉良上野介に切りつけるといふ事件がありました。内匠頭は切腹、浅野家は断絶になりました。映画やテレビドラマでお馴染みの赤穂浪士の討ち入りは有名ですが、なぜ松の廊下の刃傷事件が起きたのか、本当のことは分かっておりません。

馳走役として上野介の指導を受けていた内匠頭が、十分に賄賂を払わなかったために、上野介から

嫌がらせを受けたなど諸説がありますが、両者は塩をめぐつて対立していたとも考えられています。この時代、高級な塩は三河の吉良で生産されていました。内匠頭は上野介から製造技術を学び塩田経営を始めました。その結果が今でも有名な赤穂の塩です。製塩がうまくいくようになって販売を進めたのは討ち入りの立役者大石内蔵助でした。やがて、赤穂の塩は吉良の塩よりも売れるようになっていききました。もしかすると上野介は恩を仇で返されたと思っていたのでしょうか。そんな状態では、松の廊下ですれ違った二人に何が起こっても不思議ではなかったということです。

やはり、受けた恩はきちんとお礼として返さなければならなかったのでしょうか。おぼっちゃん育ちの内匠頭ではそんなこともわからなかったのでしょうか。吉良様にも、自分の家臣にも大迷惑をかけたしまいました。

さて、いよいよ総選挙が公示されました。民主党がポロポロになり、数多くの政党が乱立しています。とても覚えきれぬものではないでしょうか。政策はみなさんいいことばかり書いてありますが、本当に実現できるものかどうかは、当人たちでもわからないでしょう。

政権から遠いところにある政党ほど、きれいな事を並べ立てます。本当に政権が取れたらどうするつもりなのでしょう。

ところで、議員たちの離合集散を見てありますと、選挙の顔を求めてウロウロしているように見受けられますがどうでしょうか。大體政策なんてやってみなければ分からない要素がいっぱいです。あちらに見た目のいい顔が旗揚げすれば、そちらに参加し、またもつといい顔が出てくればそちらについていってしまう。しかし、本音を言えば、みなさん生きるために議席を獲得するためにはなり振り構わずで、仕方がないかもしれませぬ。「脱原発・よし」「強い日本・よし」「格差是正・よし」「脱役人・よし」「地方分権・よし」。

みんないい事しか言わない。庶民にできることは、嘘を付いたり失政した権力者を引きずり下ろすことだけです。よい年になりますように。

「慈眼寺たより」 第十三号

平成二十四年十二月十日 発行

ホームページ

<http://www.ma.ccnw.ne.jp/jigenji/>